

## 小規模多機能 4 つ目のサービス

横浜市 旭区

小規模多機能型居宅介護事業所ラウレア

管理者 鎌田 久子

### 1. はじめに

地域の中で認知症の方が普通に暮らせる社会を目指して、各地域で様々な取り組みを行っている「地域包括ケアシステム」。その一役を担う小規模多機能型居宅介護事業所では、様々な相談が舞い込んできます。この事例は、区役所、ケアプラザ、認知症専門医、ソーシャルワーカーという様々な職種の方が集って、介護サービスに繋がれなくて家族や地域が困っている認知症の方の対応について、集中的に対応していく「認知症初期集中支援チーム」からの相談から始まった方です。現在も、まだまだ課題は多いですが、地域の方たちとともに考えていくスタイルは、まさに地域密着型。地域の中のラウレアを目指して日々模索しています。

### 2. 事例や取り組みの紹介

A 様女性、80才、要介護1。認知症の生活自立度はⅢb

1年前にご主人を亡くしてから独居。ADLはほぼ自立。毎日自宅から最寄り駅までの約1.5kmを歩いて食事や買物に行っています。昨年、アルツハイマー型認知症と診断されていますが、元看護師ということもあり、受診や服薬に対して強い拒否があります。認知機能が低下していることに対する病識はなく、自分は困ったことはないと言います。

しかし、実際には、物を置いた場所を忘れてたり、金銭管理ができなくなってきていることに加え、物盗られ妄想がひどくなり、自分の失敗を誰かのせいにする作話が顕著に現れてきました。特に娘さんに対する被害妄想が強く、娘さんが精神的ダメージを受けて関われなくなっています。

なお、今回の事例発表にあたり、個人情報伏せることを条件に娘さんより承諾を得ています。

元々、何か困ったことがあれば本人から娘さんに電話をしていましたが、度重なる電話と一方的な怒りの矛先として娘さんも精神的に疲れてしまったので、相談できる先を作らなければならぬと考えました。まずは信頼関係構築のため、ケアマネジャーが週3回訪問をして、世間話をするところから始めました。

半月後にはケアマネジャーの顔を覚えて下さり、「一緒に食事に行く」という名目でラウレアに来ていただくことができるようになりました。その他、遠くに買物に行きたい時などに車を出して付添をしたりして信頼関係の構築に成功したかのように見えました。

そんなある時、ケアプラザより、電話が入りました。「A様がラウレアでキツネの襟巻を置いてきた。返してくれない」と仰っているとのことでした。別の電話では「ヴィトンのバッグを置いてきた」とも仰っています。

すぐに訪問してお話を伺ったところ、この前行った時に置いてきたとのこと。あそこには変な人もいるし、もう2度とあそこへは行かないと仰り、以来通いには来なくなりました。

また、お金の使い方が少々荒く、お金を持っていると使い過ぎてしまうところがあります。最初のうちは娘さんが口座に少額ずつ入れていたものを自分でおろして使っていました。人への気遣いがある性格で、お金の支払いが気前良く、実際よりも多く払ったり、お財布からお金がとび出していたりで、タクシー会社から区役所に「騙されるのではないか」と心配の電話が入ることもありました。また、飲食店で食事中に意識消失して店員さんが救急車を呼んでくれたのですが、本人が受診を拒否して家まで救急車で送ってもらったり、歩いている時に地域の方に声をかけられ、話のつじつまが合わずに、心配されて警察に通報されて保護されたものの、警官に抵抗して手に負えず、ケアマネージャーが迎えに行ったこともありました。いわば地域全体がA様の見守り役です。

金銭管理については、最初にご自分で郵便局へ行ってお金を下ろせていたのですが、現在では通帳を紛失し、下ろし方もわからなくなりました。一度に現金を渡すと一度に使い切ってしまうということもあり、ご家族が週に1回、自宅とラウレアに持って来た現金を、週半ばでラウレアが訪問して届けています。週1回訪問してお金を渡す生活をしばらく続けていましたが、しばらくすると、お金が無くなると自分で歩いてケアプラザに来て、ケアプラザ職員に連れられてラウレアに来るようになり、現在では、毎日、朝起きたら自分で歩いてラウレアに来られるようになりました。昼食を食べ、掃除や洗濯など職員の手伝い、昼食の片づけ等を行って、職員からの「Aさん、ありがとう」という言葉を嬉しそうに聞いた後、自分で歩いて帰るという生活パターンができてきました。

### 3. 考察

2025年問題で認知症の方が多くなると言われ、「死ぬまで自宅でいたい」と語る高齢者が増えていく現状で、横浜地域包括ケア計画によると、「地域で支え合いながら、介護・医療が必要になっても安心して生活でき、高齢者が自らの意思で自分らしく生きることができる」ことを目標としています。私たち介護の現場で何ができるかを考えていかなければなりません。

A様のような方が地域で生活を続けていくには課題は付きものです。最終的には課題がありながらも困った時には誰かに相談ができて、できるだけ長く地域で自分らしい生活を続けていけたら良いと思います。

### 4. 終わりに

小規模多機能サービスは、事業所で提供するサービスと、自宅で提供するサービスの他、「多様なニーズに対応するサービス」があると思います。「通い」や「泊まり」でも「訪問」でもない、4つ目のサービス、いわゆる「認知症の方本人の気持ちに寄り添って相談に乗り、細やかにサービスを提供すること」です。金銭管理であったり、地域との繋がりや橋渡しであったり、後見的な立場であったり。それによって、認知症があってもできるだけ長く地域で暮らせるという「地域包括ケアシステム」の大黒柱となるべく、今後も地域の中のラウレアをアピールしていきたいと思っています。